

記念講演

「演劇が育む一人で立つ力、支え合う力」

講師 演出家/鳥の劇場芸術監督 中島 諒人 先生

平成30年度中国地区私立幼稚園教育研修会で、中島諒人先生に記念講演をいただきました。「演劇が育む一人で立つ力、支え合う力」という演目で、演劇が持つ重要な役割についてと、実際に劇団員のお芝居「3匹のやぎのがらがらどん」を交えながらの講演をしていただきました。

一部内容を紹介いたします。



<演劇とコミュニケーション>

- ・ ビデオやDVDと演劇には違いがあり、演劇のよいところは生でお客さんに届けるところにある。インターネット時代になって生でやりとりをするというのが非常に少なくなっている。指先だけでほぼ人とコミュニケーションができてしまう現状がある。
- ・ 人から生に向かって伝えコミュニケーションし、「はい」とか「いいえ」とか「いや、こうだね」というふうにダイレクトなコミュニケーションをとっていかなければ何も決まらないし、何も進んでいかない。
- ・ どんなにコミュニケーションテクノロジーが進化しても、最終的には人間あるいは動物としてコミュニケーションはエネルギーを使わなければいけない。

<学習指導要領と演劇>

- ・ 新しい学習指導要領は今まで知識・技能を軸にしていたが、知識・技能でインプットしたものをどのようにアウトプットしていくのか。思考力・判断力・表現力が求められる。もう一つそれらを支える人間力も求められるようになっていく。
- ・ 課題意識は知識・技能だけを入れてそれを反復しているだけでは、今の世の中の様々な課題に対処することができない。色々な課題に対して、覚えたことや調べたことを応用していかなければいけない。めげそうな時に頑張ろうと思えたり、他者を信頼して一緒に仕事をしたり、知識だけではない様々な力があるようになってきている。
- ・ まさに演劇というのはそういうエネルギーとかコミュニケーションをととても大事にしており、現代社会の中で非常に重要な役割を担っていると思っている。

<なぜ子どもに演劇をみせるか>

- ・ 演劇は想像力を使う。たとえばCGあるいはアニメーションは全てを視覚化できる。演劇はそれができない。しかし人間にとって何が一番人間らしい力か。それは想像力である。見えたものを通じて見えないものを想像するということはもっとも人間らしい力である。
- ・ 子どもに演劇を見せることによって、「なにか色んなものが見えたような気がしたよ」「色んな音が聞こえたような気がしたよ」というような体験を持ってもらいたい。その想像力が今、どんどん必要になってきている。

<親子で一緒に子ども向けの演劇をみることの意味>

- ・ 子どもはおもしろいところがあると親の顔をみる。私はおもしろいと思うけどお父さんお母さんはどう？と言う風に親の顔をみる。それに対して「これおもしろいね」と言うと子どもはすごく充実する。何がおもしろい

ろいのか、何が楽しいのか、何が素敵なのか親子で共有する。

- ・ 面白さ、楽しさ、感動というのは放っておいたら誰でもできるようになるのではなく、伝承しなくてはならない。親から子へ素敵なものの伝承の場を共有する魅力が演劇にはある。

<演劇「3びきのやぎのからがらどん」について>

○物語の分析として3匹のやぎが太ろうとして山に登るわけであるが、どの位お腹がすいているのか。

2種類の見立てがある。

(見立て1) ものすごくお腹がすいている。

- ・ 生き物にとってお腹がすくというのは存在に関わる。つまり死に向かって引っ張られるということ。飢えにおいて生き物が生きようとする力が働いてそこから物語が始まる。

(見立て2)

- ・ 飢えというものを成長欲求と読むこともできる。飢え、あるいは成長欲求から始まって、生き続けるために山を目指していくという設定。

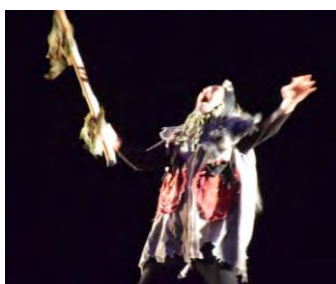
○もうひとつの面白さ

- ・ 私たちの日常社会では大きい人が小さい人を助ける。しかしこの3匹は仲間を売る。仲間のためにぼくを食べて下さいという美しいことは言わない。でも決して売るというやらしい感じはない。
- ・ それぞれの命は生きていたい。一つ一つの命の輝きがあって、食欲に生きていこうとする生き物の根本的な在り方を表している。助け合おうとしているのではなく、それぞれが食欲に生きていこうとする姿がある。

○トロールの存在

- ・ やぎが生きている健やかな命の象徴だとすると、トロールは死の象徴であったり、色々な世界に存在する虐げられたりする存在なのかもしれない。悪かもしれない。生の世界と死の世界のぶつかり合い、そして生の世界が死の世界を克服して豊かな生に立ち返っている。

<演劇「3びきのやぎのからがらどん」>



<遊びきることと演劇>

○没入するということ、これが、「遊びきる」のキーワード。どれだけ没入してあそべるか。子どもが一生懸命やったらその遊びを持続させることを大事にする。

○人間にとって野生の力とは「仲間と共に未知の領域に分け入って、新しいことに挑戦しようとする心」である。

○子どもたちの中にある色々な力を見極め、ひとつひとつをていねいに育てていく。少なくとも邪魔しないで応援していく。それが大人に求められることかなと思う。

○幼いという漢字をみていると小さい力ということ。演劇はその小さい力を作るってということでも良いし、観るということでも良い。演劇は小さい力を大事に育てていくという力を持っている。

○小さい力、恐るべき尊敬すべき小さな力をどう育てるかというのを、本当に大人に問われていることである。

中島先生ありがとうございました。